

〈付録一〉

日本経済新聞・・・一九八九・五・十一

〈わたしとふるさと〉

### 筑波山の雄姿を心の糧に

人それぞれに心の原風景というものがあるとすれば、私の場合、それは一にも二にも筑波山である。私は筑波の西方十五キロにある下妻という小さな町で生まれ、朝に夕に筑波山を仰ぎ見ながら十六歳までを過ごした。私の精神形成にとって筑波山は計り難いほどの意味をもつ。

十歳で母を病いで、一三歳で兄を戦争で失った私は、戦中と敗戦直後の苛酷な時代をこの山麓で生きた。少年時代のさまざまの悲しみや苦しみをふかく癒し、挫折や失意から立ち直らせ、望みを与えてくれたのは、いつも筑波山のあの雄姿であった。それは私にとつて、ときに母のごとく、父のごとく、神のごとく映じた。

筑波は眺める場所によって山容を変えるが、無論、私にとつての筑波山はわがふるさとから見る筑波山でなければならぬ。私は下妻東部の田園地帯から眺める筑波山が一番美しいと思うし、それ以外の場所からの山容にはかえって目をそむけたくなる。筑波山は下妻から見るにかぎるといまでも固く信じている。

小学校四年生のとき、初めて汽車に乗り横浜の姉の家を訪ねたことがあるが、次々に筑波山の形が変わっていきやがて見えなくなってしまうときは、異国に旅立つような緊張感と心細さに胸がしめつけられるほどだったことを覚えている。

両親の墓があるので、いまもたまに下妻に帰ることがあるが、実は筑波山に逢いにいくのである。時間がなくて墓参りができず、筑波山を眺めただけで帰ってきたこともある。筑波を眺めることは、両親や兄弟や友人や恩師に逢うことすべてを兼ねているように、私には思える。

ただし、私は筑波山いがいのふるさとの風景には、ほとんど興味がない。余りにも変わり過ぎていて、直視するにしのびないからである。いつか帰郷した際、母校の小学校や高校を訪ね、くまなく校庭を歩いてみたが、木造の校舎がすべて鉄筋コンクリートに建て替えられ、池も埋められたりして、私が学んだころの面影はほとんど無くなっていった。改めて、“いま浦島”の思いにかられたのであった。故郷を後にして四十余年、あの筑波山の雄姿いがい、わがふるさとはすべて歴史上の存在と化してしまったようだ。